

# 小澤蘆庵書翰解題

兼 清 正 徳

本稿は岡山県倉敷市玉島長尾の小野招月亭所蔵史料のうち、小澤蘆庵書翰五通と、大東急記念文庫所蔵史料のうち、小澤蘆庵書翰一通との計六通の書翰を解説し、若干の註記を付して蘆庵研究者に史料として提供するものである。

## 一 小野泉蔵宛小澤蘆庵書翰(その一)

尚々御舎兄様何之御障無<sub>レ</sub>之候哉。先比河社被<sub>レ</sub>進被<sub>レ</sub>下候哉。御一統之儀別ニ袖書不<sub>レ</sub>致ニ進上<sub>一</sub>候。宜被<sub>ニ</sub>仰入<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。いつもいつもいそがハしく早々申殘候。以上。

一筆致ニ啓上<sub>ニ</sub>候。甚寒節彌御壯健可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成<sub>ニ</sub>御凌<sub>ニ</sub>奉<sub>レ</sub>壽候。先達而御上京之節折々預<sub>ニ</sub>御訊問<sub>ニ</sub>辱奉<sub>レ</sub>存候。御下向後以<sub>ニ</sub>書状<sub>ニ</sub>御安否可<sub>レ</sub>承<sub>レ</sub>之處、日々繁用紛々不<sub>レ</sub>

能<sub>ニ</sub>其儀<sub>一</sub>背<sub>ニ</sub>本意<sub>一</sub>候。

御下向前借用爲隣抄久々留置、七十餘年末曾有之珍說承候。驚入候御事恐入絶<sub>ニ</sub>言語<sub>一</sub>候。依熟覽甚延引、此度致ニ返進<sub>一</sub>候。御入手可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下、久々留置忝奉<sub>レ</sub>存候。

一 野翁往昔撰置候袖中六帖、此度令<sub>ニ</sub>彫刻<sub>一</sub>乍<sub>ニ</sub>麴紙<sub>一</sub>意部致ニ進上<sub>一</sub>候。苦生之程之古物、於<sub>ニ</sub>御流義<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>用間敷候得共、御笑覽可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。頓首。

(寛政九年) 十二月廿四日

小澤蘆庵

嶋

小野泉蔵様

註 御舎兄様 小野猶吉、名は方、号は樸翁、屋号は移山

亭。備中国浅口郡長尾村の豪農。文化十三年七月五日没、五十八歳。長尾堂山に墓碑があり、撰文は西山拙

齋、別に頼山陽撰並書の墓碑文がある。

河社（かわやしる） 契沖著、五卷、隨筆集。寛政八年  
初春に蘆庵は門人前波黙軒・橋本経亮らと契沖手記  
本を校合し、寛政九年五月に蘆庵・黙軒の序を付し  
て、蘆庵門の書店吉田四郎右衛門元長の甘泉堂から  
五卷にまとめて出版した。

先達而御上京……御下向 寛政九年の夏のころ小野泉  
蔵は京都に上り、秋に郷里に帰った。

和歌為隣抄 澄月著、二卷二冊、寛政九年刊。

袖中和歌六帖 蘆庵著、上下二卷、寛政七年仲冬蘆庵  
序、同八年正月小川布淑記、同九年六月吉田四郎右  
衛門元長上梓。

小澤蘆庵 中野武者「小澤蘆庵」「小澤蘆庵その後の  
研究」に詳しい。

小野泉蔵 備中国浅口郡長尾村の豪農小野正竝の四男  
で猶吉（樸翁）の弟。分家して家号を桜本、屋号を  
招月亭と称した。漢学を西山拙齋に、漢詩を菅茶山  
・頼山陽に、和歌を澄月・慈延に学んだ。平安四天  
王のうち澄月・慈延は泉蔵の直接の師であるが、蘆  
庵・蒿蹊にも師事したことは、招月亭所蔵の蘆庵・

蒿蹊の書簡によって窺知することができる。天保三年  
閏十一月十七日没、六十六歳。墓碑は山陽の撰書であ  
る。法名は仁光樗山居士。招月亭当主は小野文三氏。

## 二 小野泉蔵宛小澤蘆庵書翰（その二）

正月廿五日之御状相達候。致三拜見一候。去秋御歸國後  
御家内御病人御親類中故障等御座候由、彼是御心配御  
事察入候。

爲隣抄御落手之段致三承知一候。袖中六帖御重寶被レ成  
候旨致三大慶一候。染筆物之事致三承知一候得ども、先比  
より病氣罷在平臥ニ付、返書も令三代筆一候程之義故、  
此節御断申入候。

隨而爲三年始御祝儀一金子百足被レ贈下三忝致三祝納一候。  
且又貴邊土産之由烟草御惠贈忝致三受納一候。當春ハ又  
々御上京も可レ被レ成之様待入候。御上京も候ハ、面  
上何角可三申承一候。

右御答爲可三申入一如此御座候。恐々謹言。

（寛政十年）二月廿三日

小澤蘆庵

小野泉藏様

御机下



小澤蘆庵画像 (富岡氏蔵)

尚々猶吉士よりの御傳言致ニ承知ニ候。猶又宜御申入可レ被レ下候。臘月出書状参り此度返書差下候。以上。

註 去秋御帰国 寛政九年秋小野泉藏長尾村に帰郷

先比より病氣罷在 芦庵は寛政十年二月十五日夕から発熱し、病名不詳のまま、門人の医師中西良恭の投薬により、三月四日から快方に向い、六十日間の養生により平癒した。

三 小野泉藏宛小澤蘆庵書翰(その三)

爲ニ貴答ニ去月廿日付之貴札相達致ニ拜見ニ候。逐日秋冷相加候處、御壯健被レ成ニ御凌ニ奉レ壽候。

一 美濃部元藏方へ返達之儀御頼申候處、早速御達被レ下忝奉レ存候。愚詠短冊所望ニ付此度指下候。愚詠進達之儀は何も構無レ之、他所弟子衆批評は失禮之儀故断申入候事ニ御座候。

一 貫之主像爲ニ御書被レ成候由、誠中世之一人、仰而可レ信義ニ候。但讚之儀は愚老躰可ニ相憚ニ義ニ御座候。今日茂兵衛一軸持参候。繪様聊所存も御座候。猶委敷ハ自レ跡可レ得ニ御意ニ候。

御一軸ハ茂兵衛方へ先差戻置申候。猶重便可レ得ニ御意ニ候。恐惶謹言。

九月三日

小澤蘆庵

孤鷗

小野泉藏様

御報

尚々猶吉殿へも宜被<sup>ニ</sup>仰入<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下候。以上。

註 他所弟子衆 泉藏は慈延門人。

茂兵衛 万屋茂兵衛、飛脚問屋。

#### 四 小野泉藏宛小澤蘆庵書翰（その四）

去七月二日芳札同卅日到來、忝致<sup>ニ</sup>拜見候。當秋者殘  
炎久敷不<sup>レ</sup>消、何方茂難<sup>レ</sup>凌候處、彌御壯健被<sup>レ</sup>成<sup>ニ</sup>御  
勤<sup>ニ</sup>目出度奉<sup>レ</sup>存候。今將冷氣仕成候、益御平安被<sup>レ</sup>成<sup>ニ</sup>  
御凌<sup>ニ</sup>候哉承度奉<sup>レ</sup>存候。

先達而御頼之品相認進上候處、為<sup>ニ</sup>御挨拶<sup>ニ</sup>保命酒一陶  
黃實一片預<sup>ニ</sup>御贈惠<sup>ニ</sup>、殊名酒澤山箸物御丁寧被<sup>ニ</sup>仰付<sup>ニ</sup>、  
御懇篤不<sup>レ</sup>浅忝奉<sup>レ</sup>存候。

此度藥屋下向之由承候。乍<sup>ニ</sup>延引<sup>ニ</sup>御禮可<sup>レ</sup>得<sup>ニ</sup>貴意<sup>ニ</sup>及<sup>ニ</sup>  
貴扱<sup>ニ</sup>候。

當秋も御登京も可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>成様ニ兼而致<sup>ニ</sup>承知<sup>ニ</sup>下待居候  
處、正二郎物語ニ而承候處、御母公様御徒然<sup>ニ</sup>付忍石  
被<sup>レ</sup>留候之由、是又御孝心之御事致<sup>ニ</sup>感心<sup>ニ</sup>候。春ニ成  
候而ハ差免御請、緩々御上京相待候。積鬱<sup>ニ</sup>可<sup>ニ</sup>申解<sup>ニ</sup>相  
樂候。

先者右爲<sup>ニ</sup>御禮<sup>ニ</sup>一如<sup>レ</sup>此御座候。頓首。

十月朔日

小澤蘆庵

孤鳴

小野泉藏様



小野泉藏宛小澤蘆庵書翰（その四）

尚々當年者一統大旱、御支配地水手懸引、嘸々御心配奉レ存候。此地ハ早ハ格別も無レ之候得共、殊之外疫病流行、人多及ニ死去ニ候。お互無レ恙迎冬大慶仕候。次第ニ又冷氣強可レ有レ之、隨分御用心被レ成御座ニ候様奉レ存候。以上。

五 小野泉藏宛小澤蘆庵書翰（その五）

尚々去秋ハ御上京も可レ被レ成候歟と御荒増様下待候得とも無ニ其儀ニ殘心奉レ存候。御見合御上京相待候。御舎兄様へも宣御傳聲可レ被レ下候。木下氏へも宜被ニ仰入ニ可レ被レ下候。以上。

春陽之慶賀御同意申納候。餘寒節彌御壯健被レ成ニ御超歳ニ重畳目出度奉レ存候。年始爲ニ御祝詞「芳札并御看代方金百疋預ニ御贈惠ニ忝奉レ存候。野翁無事致ニ加年ニ候。然者先達而西上人画讃乍ニ見苦敷ニ相認申候所、御丁寧之御挨拶及ニ赤面ニ候仕合御座候。

且又代匠記全哥相認候本も有レ之哉、若御座候ハ、御求被レ成度之由、往昔全哥相認候も見及候事有レ之候ニ

付、本屋共へ其由申入候處、全哥有レ之候も候へ共、至而稀ニ御座候。若出候ハ、爲レ念可レ申之由申候へく候。誠全哥有レ之ハ可レ爲ニ重寶ニ被レ存候。見當候ハ、早速爲ニ御念ニ可レ申候得共、多分無レ之方と被レ存候。先は御答爲ニ御禮ニ如レ此御座候。恐惶謹言。

二月廿五日

小澤蘆庵

孤鷗

小野泉藏様

貴下

註 木下氏 木下幸文。備中国浅口郡長尾村の農家に生まれ

た。通称は民藏、名は義質、のち幸文と改名した。小野猶吉（本書翰に御舎兄様とある人）に伴われて、寛政六年に十六歳で上京して澄月に就学し、澄月没後の寛政十二年に二十二歳で二度目の上京をして慈延に学んだ。この時に蘆庵および伴蒿踪にも知られている。

万葉集代匠記 契冲著、二十卷、初稿本は天和年間のころに成り、精撰本は元禄三年に成る。

差出年について 小野招月亭藏の寛政十二年十二月二十

三日付小野泉蔵宛慈延書翰に「誠ニ当秋ハ御違約云々」とあるので、これを本書翰の「去秋ハ御上京…無<sub>レ</sub>其儀」であるのと一致するものとすれば、寛政十二年の翌年の享和元年の差出しとすることができよう。

## 六 丸豊二郎宛小澤蘆庵書翰

九月之御状相達候。彌御堅固被<sub>レ</sub>成御所望奉<sub>レ</sub>存候。爲<sub>ニ</sub>重陽御祝儀ニ白銀一封預<sub>ニ</sub>御投惠<sub>一</sub>過量之至候。

御詠草被<sub>レ</sub>遣則一覽候而致<sub>ニ</sub>返進<sub>一</sub>候。春被<sub>レ</sub>遣候残り有<sub>レ</sub>之候よし御申こし則とり出候。半三郎き候。見つさ候て此度指下候。

一 契沖書物之儀御尋ニ候。此事先々も申候儀何と御聞候哉。板行ものなれハいつかたの本やニも有<sub>レ</sub>之候。則和字正濫又改観抄等板行故、いつかたの本やニも有<sub>レ</sub>之候。代匠・餘材・勢語・河社等はまれく本やニも有<sub>レ</sub>之候へ共、本やしたて本ニ而中をぬきらちもなき本のミニ候。又日本紀ノ竟宴和哥・拾遺六帖・大嘗會

和哥・廿一代集書入・五帖書入・厚顔抄等ハ本やニハ見當不<sub>レ</sub>申候。是等本やニよき本御座候ハ拙者何ソセはいたし別ニうつさせ可<sub>レ</sub>申や。無<sub>レ</sub>之故うつさせ諸方へ遣候事ニ候。先達而申入候通、御寄合御こしらへの事も成就不<sub>レ</sub>致候と存候。所々社へ奉納致度願人おほく、手前之校本去々年より筆工七人にてうつし申候。所々の事故于<sub>レ</sub>今うつし居申候。是者後世具眼之人のためニ御座候。

右ニ付一向無<sub>ニ</sub>寸暇<sub>一</sub>其上門人衆次第おほく老衰こまり入申候。庵原ゆき方へ一封御届可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。以上。

十一月廿八日

丸豊二郎様

小澤蘆庵

註 和字正濫抄 契沖著、五卷、元禄八年刊。

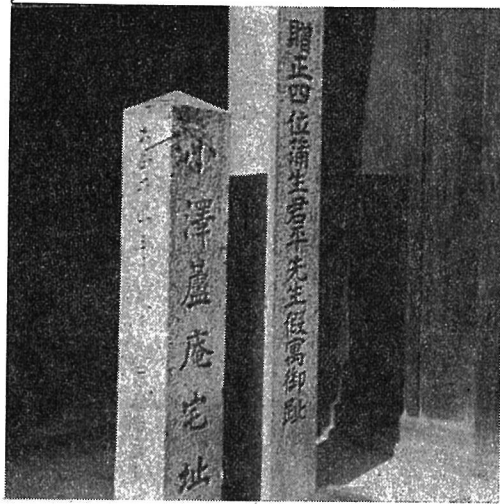
百人一首改観抄 契沖著、五卷、延享五年刊。

万葉集代匠記 (前記)

古今餘材抄 契沖著、二十冊、元禄五年成。

勢語臆断 契沖著、四卷、元禄五年以前成。

河社 (前記)



日本紀竟宴和歌 以下は契沖書入本。  
厚顔抄 契沖著、三卷、元禄四年成。

小澤蘆庵宅跡（京都市左京区丸太町通  
岡崎通西入北側角）